

【総論】

山陰地域の生活世界を史学する —矢田貝家調査プロジェクトの軌跡—

板垣貴志

はじめに

矢田貝家調査プロジェクトとは、2015年度から2025年度の11年間にわたり島根大学法文学部山陰研究センターと東京大学経済学部資料室が連携しながら、矢田貝家（鳥取県西伯郡伯耆町）に残されていた歴史資料群を中核に据えて実施した共同研究である。矢田貝家の住宅は、1854（嘉永7）年に建築された主屋を中心として、長屋門、茶室など8棟が2011年に国登録有形文化財（建造物）に登録されている。すでに東京大学経済学部資料室による2011年から2013年にかけての概要調査によって、主屋や土蔵から膨大な近現代史料群が発見されていた。山陰地域において、体系的に近現代史料群を調査している事例は多くなく、地方大学側としては、専門的な人員の豊富な都市部の研究機関の成果と連携を大切にしたい思いもあった。

この共同研究プロジェクトは、伯耆町教育委員会の協力のもと、地元の住民とともに歴史資料を紐解くという、大学・行政・住民の三者が連携しつつ住民参加型の調査スタイルで取り組んできたことに大きな特徴がある。2016年2月に地元の伯耆町にて講演会を開催して調査への参加を呼びかけ、同年4月から住民参加調査を開始している。

矢田貝家は、山陰の出雲・伯耆地域に巨大な影響力を持った「たたら製鉄」の鉄山師などと異なり、ごくありふれた平凡な中規模地主に過ぎない。また、家の歴史も浅く、分家後の幕末から明治期に経営規模を拡大させた新興地主である。どこにでもある中規模地主の調査を不思議に思われる方も多かった。それに対して、「矢田貝家は特徴がないことが特徴、であるがゆえに、いまの生活世界をみつめて山陰地域の近代経験を問うために重要な史料群となる」のだと伝え続けてきた。それは、日本社会も明治初年から150年以上が経過し、これまでの近代経験を生活に根差して歴史学的に再考する段階に立ち至っていると感じるからに他ならない。

日本の地方の疲弊や荒廃が叫ばれて久しい。とりわけ中山間地域はより深刻な状況となっており、さまざまな「地域づくり」が全国各地で進められている。本調査プロジェクトは、中山間地域における歴史資料保存のあり方と歴史実践、また今後の日本近現代領域における地域史研究のひとつの視座を提示することを目標としてきた。本総論は、共同研究の推移を述べるとともに、調査プロジェクトの意図を、山陰地域の近現代に関する研究史や隣接諸科学との対話を通して論じることを目的としている。今後の地域をフィールドにした日本近現代史研究への提言として受けとめていただければ幸いである¹。

1. 山陰地域における近現代史研究の推移

まずは、山陰地域（鳥取・島根の両県）の近現代史研究の推移を概略的にまとめておきたい。

煩雑になるので、全県的な近現代史を取り扱った刊行物に限って検討し、戦後に各自治体が発刊した史誌類は除外している。

(1) 鳥取県

鳥取県では、1932年に発刊された『鳥取県郷土史』には「現代史」の項目が立てられ、すでに戦前において明治期の歴史研究に着手している²。政治史を中心に産業史や教育史に関しても叙述されており、「明治後各方面に活躍せし本県人」や叙勲者と各種の表彰者を列挙した「本県下に於ける篤行者」を組み込むなど、戦後に編纂された自治体史誌の原型的な性格も確認できる。また米子市は、1942年に『米子市史』を発刊し、これもまた明治期を「現代史」として取り扱っている³。

戦後の鳥取県における近現代史研究にとって、まずは1969年に発刊された『鳥取県史』（近代篇4巻）が、内容的にも当該期に編纂された他県の県史と比較して充実していることを指摘しておきたい⁴。総説篇、政治篇、経済篇、社会篇・文化篇の4巻が総合的に叙述されている。

同時期には、毎日新聞鳥取版での連載記事がもととなった『鳥取百年』が発刊されている。夜明け編、政治編、経済編、自然編、社会編、教育編、文化編および「農業経済の動き」を加えたもので、網羅的で手取りやすい読み物となっている⁵。また、日本海新聞社も新聞連載のなかから「教育・文化・風俗・軍事編」部分をまとめて『郷土とっとり 激動の100年』を出版している⁶。「政治・経済編」も企画されていたようだが、前者のみが出版された。これらの書籍は、明治改元100年を記念して企画されたもので、当時の政府が推進したいいわゆる「明治百年記念事業」の雰囲気刻印されている。

1970年代には、松尾茂によって日本海新聞での連載をもとに『鳥取明治大正史—新聞に見る世相—』と『鳥取昭和史—新聞に見る世相—』が発刊され、1868(明治元)年から1975(昭和50)年にわたる事項が新聞資料をもとにして編年形式で詳細に紹介されている⁷。ちなみに松尾によれば、因伯時報および鳥取新報ともに明治20年代と30年代の紙面が残存しておらず、その時期は大阪朝日新聞を参照して記述されている。

その後は、1997年に山川出版社の新「県史」シリーズとして『鳥取県の歴史』が刊行され、近現代部分の9章「鳥取県の近代化」と10章「環日本海交流の歴史」を内藤正中が執筆している⁸。また、2005年に吉川弘文館の街道シリーズとして『街道の日本史37 鳥取・米子と隠岐—但馬・因幡・伯耆—』が刊行されており、近代部分は、北尾泰志、田村達也、小山富見男、西田良平、赤木三郎、坂本啓司が執筆している⁹。1998年には、鳥取地域史研究会が設立され、『鳥取地域史研究』が継続的に発刊されるようになった。また、中国電力株式会社エネルギー総合研究所が、鳥取県内の自治体史誌から産業史部分をまとめて全県的に叙述した『鳥取県を中心とした産業発展の歴史』がある¹⁰。

(2) 島根県

戦前の島根県では、1923年に島根県教育会が『島根縣誌』を発刊しているが、近現代部分は地誌的な内容が中心で史料にもとづいた歴史的な編纂物ではない¹¹。一方、1921年から1930年

にかけて島根県学務部島根県史編纂掛が前近代史叙述を中心とした『島根県史』全9巻を刊行している。その第9巻第10篇では明治維新时期を対象としているが、廃藩置県までの叙述にとどまる¹²。島根県内の近現代史研究は、鳥取県とは異なり戦後から本格化したといえよう¹³。

戦後は、1950年代後半から1960年代にかけて、島根大学社会学研究室の山岡栄市を中心とした総合調査が展開して、近現代史研究の先鞭をつけることとなった¹⁴。『大根島―生態と課題一』（1956年）、『山陰農村の社会構造』（1959年）、『漁村社会学の研究』（1965年）、『三瓶山周辺の社会と文化』（1966年）、『後進地域の社会と文化』（1966年）、『農村研究の軌跡』（1976年）と、精力的に調査報告論集を発刊している。一方で、島根県では、『新修島根県史』（全10巻）が1961年から1968年にかけて編纂、刊行された。通史編の近現代部分は、内藤正中と山岡栄市が執筆している。編纂事業の経緯や経過における諸問題は、『新修島根県史編纂余録』（1968年）に記録されているが¹⁵、近現代部分に関しては同時期に編纂された『鳥取県史』と比較しても、史料収集の側面を含めて十全な内容とはいえないだろう。

1960年代後半から1990年代にかけては、内藤正中を中心とした研究組織による成果が発刊されている。1968年には、いわゆる「明治百年記念事業」への対抗として、島根大学教員（内藤正中、大久保哲夫）と県内中学高校教員（小野繁俊、森安章、大西文男、池橋達雄）を中心とした島根教育科学研究会によって『島根の近代史―民主主義運動のあゆみ―』が発刊されている¹⁶。また、論集『近代島根の展開構造』（1977年）と¹⁷、同年に松江市で開催された地方史研究協議会大会の成果論集『山陰―地域の歴史的性格―』を特筆すべき刊行物としてあげておきたい¹⁸。両書は、歴史学的手法による分析的な論文集となっている。その後も内藤は、『島根県の歴史』と¹⁹、『図説 島根県の歴史』を執筆している²⁰。その他、この時期に山陰中央新報社は創立百周年を記念して『新聞に見る山陰の世相百年』を発刊した²¹。

その後、吉川弘文館の街道シリーズとして『街道の日本史38 出雲と石見銀山街道』が刊行されており、近代部分は相良英輔が執筆している²²。また、山川出版社の新「県史」シリーズ『島根県の歴史』では、竹永三男が、10章「近代島根の人と地域」および11章「過疎地に芽吹くもの」を担当執筆している²³。また、2013年に中国電力株式会社エネルギー総合研究所は、『島根県を中心とした産業発展の歴史』を刊行した²⁴。

島根県教育庁文化財課による調査報告書では、2002年に『島根県の近代化遺産』があり²⁵、概論で内田融が「島根県の近代化」を、相良英輔が「島根県の近代産業」を執筆している。また、2018年の『島根県の近代和風建築』では²⁶、竹永三男が「島根県における「近代和風建築」の成立・展開の歴史的条件」を総論編で執筆している。

（3）裏日本研究と環日本海研究

以上の山陰地域史研究と比較して、より課題設定的な歴史研究として「裏日本研究」と「環日本海研究」に触れておきたい²⁷。これらの研究の前提として、高度経済成長期に農村から都市への人口移動が進み、過疎問題が発生していたことはおさえておきたい²⁸。裏日本研究の代表的な成果として古厩忠夫の『裏日本―近代日本を問いなおす―』と²⁹、阿部恒久『「裏日本」はいかにつくられたか』がある³⁰。その後、「裏日本」を停滞・後進地域とする「表日本」中

心主義を相対化し、対岸諸国とのつながりを強調することで、新しい日本海地域像として環日本海の視点が提示されていった。環日本海研究の代表的な成果として、内藤正中編『島根県の環日本海交流—地域からの国際化—』と³¹、芳井研一『環日本海地域社会の変容—「満蒙」・「間島」と「裏日本」—』をあげておく³²。しかし、残念ながら環日本海研究は、2000年代後半より各国間の関係の悪化により停滞している状況にある。

2. 隣接諸科学との対話

(1) 歴史資料論・アーカイブズ学の動向

近年の歴史学分野における研究動向の指標となりうる『岩波講座 日本歴史』全22巻には、テーマ巻として「史料論」が組み入れられている³³。そのなかでも実践活動に触れている西田かほりと奥村弘の論考に着目したい。

西田論文「近世史料と調査論」は、戦後の歴史資料調査方法の流れを概観し、1980年代に提起された現状記録への理解が深まり受容されていった経緯を論じている。矢田貝家調査プロジェクトもこの現状記録を踏まえた調査を実施している。そして、2000年頃からの歴史資料調査論は、歴史資料をどのように調査するかよりも、いかに所蔵者や地域に保存してもらうかを論点としつつあることが指摘され、いまや歴史資料調査は、保存を訴え地域に働きかける社会運動であり、さらには地域の再発見や活性化をはかる役割まで担うようになってきていると俯瞰的に推移を整理している点は重要であろう。また、日本の農村社会で残されてきた歴史資料は近世社会に形成された村・町といった共同体、イエによって維持されてきた。近年の調査論推移の背景として、近世的な社会体制が崩壊し、新たな価値観に基づく社会が生まれつつある現代において、歴史資料をこれまで同様に維持していくのは難しいとの認識があることを指摘している。

1995年の阪神・淡路大震災の際に歴史学分野にて取り組まれ、以来現在に至るまで活動が拡大し、ネットワークが全国化しつつあるのが被災歴史資料保全活動である。活動を牽引してきた奥村による論文「歴史資料の保全と活用—大規模災害と歴史学—」では、歴史学分野における地域での実践の多方面に市民参加が具体的な形を取るようになった背景には、市民社会の一定の成熟と、それを支える新たな歴史学研究の具体的な方法が提示されはじめたことにあると指摘する。そのうえで、議論を可能とする「場」を意識的に形成することの重要性を説いて、そのような課題に応える地域歴史資料学構築の必要性を提起している。

山陰地域における歴史資料保存の課題に関しては、すでに小林准士によつて的確な考察がなされている³⁴。小林は、鳥取県西部地震(2000年10月6日発生)の際に展開した被災資料保全活動の様子を紹介しつつ、その後の被災地で進展している過疎化と無住化の厳しい現実を追加調査によって明らかにした。そして、中山間地域における資料保存の方向性として、ネットワーク型の活動と行政との連携に今後の可能性を求めている。筆者も、そのような厳しい現状認識を共有している。確かに中山間地域での住民参加による資料保存および活用実践は、行政の支援なしでは成り立ちえないと現場で感じる。資料保存活動にとって行政が関わることは、都市部やその近郊地域よりもはるかに重い意味があるように思われる。

近年の地域の歴史資料保存活動に関しては、渡辺浩一の論考が重要な提起を含んでおり注目できる³⁵。渡辺は、「民間アーカイブズの保全活動が地域持続に役立つ」という言説を検証する過程で、地域社会学などの現状分析分野によって展開されている「地方消滅」論を整理し、「地域持続の実践的活動に関する研究者や実践家の側からすると、私たちが期待するほどにはアーカイブズが活用されていないし、大きな関心が持たれていない」と結論付けている。実に耳の痛い指摘である。学術の世界に身を置く現状分析分野の研究者にすら理解されないのであれば、社会に生きる一般の人びとにまで歴史資料保存への理解が広がることは難しいであろう。筆者自身も、現場にて「地域の歴史資料を持続可能なまちづくりに活かす」と意気込んではいても、その実践の意義が広く認知されていないことは肌身で感じてきた。山陰地域での歴史実践、矢田貝家調査プロジェクトは、筆者がこれまでに関西圏で経験してきた現場よりもはるかに多くの困難をとまっていた。

(2) 人文地理学・地域社会学・村落社会学との対話

学術研究全体のなかでの歴史学への期待値を測るために、数少ない理解者の議論を紹介しておきたい。限界集落における「むらおさめ」の必要性を提起している作野広和(人文地理学)は、集落の無住化プロセスを概念図にしている³⁶。

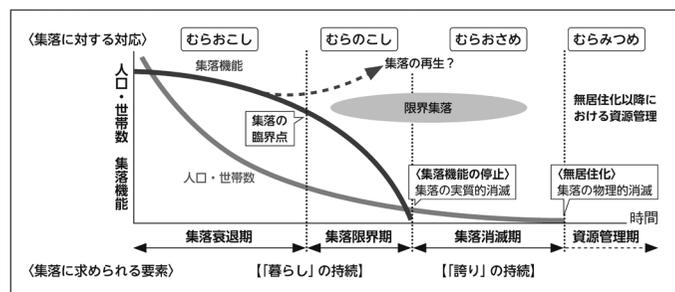


図1 集落の小規模化・高齢化と無住化のプロセス

人口・世帯数の減少による集落機能の低下を、集落衰退期(むらおこし)、集落限界期(むらのこし)、集落消滅期(むらおさめ)、資源管理期(むらみつめ)の四段階に区分し、活性化や再生がもはや困難な集落の臨界点に達している限界集落においては、居住者が主体的に集落をみつめるような活動をすべきと主張している。作野によれば、現状では放置されている集落消滅期(むらおさめ)に焦点をあてる意義は大きく、福祉的なケアや古文書や聞き取り調査による集落アーカイブズを意識的につくることによって、居住者の「誇り」を持続させることにつながるという。そして強調されているのは、地域資源を計画的に保全・管理することで、無居住化以降(むらみつめ)における家屋や農林地の放棄といった課題に対応できる点である。これを作野は、「究極の過疎対策」と呼ぶ。

歴史資料調査などの集落アーカイブズに理解のある作野をもってしても、歴史研究者への期待は、臨界点を越えた集落消滅期以降に位置づけられていることに注目されたい。現状分析分野からみた中山間地域における歴史研究者とは、集落が再生を諦めた最終局面に立ち会う、さながら「看取り役」に過ぎないのであろう。これも現代の社会的課題への対応のひとつである。そこには確かに今日的意義があるように思う。しかし、現代の歴史学はこのような役回りだけに甘んじていてよいのであろうか。

現状の農山村をフィールドにした地域社会学や村落社会学における近年の動向として、地域の「活性化」をめぐる言説や実践を、批判的に問い直す社会学の研究群が進展していることが注目できる。渡邊悟史は、この研究群を「批判的活性化研究」と呼んでいる³⁷。歴史学もその成果と積極的に対話していくことで展望できるものがあるように考えている。これらの研究群が主張するのは、今日的な政策課題と距離の置き方である。批判的視座の構築に向けての志向性には、本調査プロジェクトとの共通の土台を感じさせる。結局のところこれらの議論と同様に、人文系の歴史学は地域社会を考えるために存在するのであり、地域活性化の課題を解決するために存在しているのではない。現代の地域をめぐる政策課題から問いを解放し、あくまでも歴史学固有の蓄積(学史)と作法(方法論)から導き出される社会貢献のあり方を考えていくということに尽きるのではないだろうか。

私たち歴史研究者は、現状分析の専門家ではないことを自認する必要がある。歴史資料の保存や活用は、直接的に地域の人口や所得を増やすものではない。IターンやUターンの直接的な要因を創り出すことも難しいであろう。まずはその自覚から思考をスタートさせなければならない。

(3) 民俗学的な発想の援用

民俗学にとっての「歴史」について追及してきた岩本通弥は、柳田園男の「歴史ある平凡」という表現を用いて、以下のように述べている³⁸。

平凡とは、第1に、いわば大きな出来事だけを追い求めた旧来の歴史学が、自らとは無縁のものとして除外してきた私的で小さな些事のことであり、第2に、平凡とは日常そのものであり、当たり前になってゆくプロセスを含む動態的なものとして描かれる。民衆の日常生活へのあくなき関心の在処を示しつつ、柳田が従来の歴史学のなかに「歴史」の欠落を認め、新たな私たちの史学として構想したのが、民俗学なのだと言える。

岩本によれば、柳田は自身の民俗学を「実験の史学」と称した。不可視的な当たり前を可視化するための実験であり、生活世界のなかに歴史を見出すことで、日常凡庸のものを当たり前ではないと読み手に自覚させる研究を目指したと指摘している。これは、矢田貝家調査プロジェクトの問題意識とも共鳴しうるものである。

また近年の民俗学では、加藤秀雄が生活世界における伝承概念の再生を目指した議論を展開している³⁹。生活世界とは、フッサールの現象学に起源を持つ概念で、アルフレッド・シュッツとトーマス・ルックマンによって体系化が目指された⁴⁰。それは、私たちが生まれるはるか以前から存在し、他の人々や私たちの祖先達によって秩序ある世界として経験され解釈されてきた世界のこと、本来、生活世界は行為者が自らの手で働きかけて、変化させることのできる自律性と創造性が保障されている場という特徴を持っている。

加藤によれば、近代に至って伝承の重要性は相対的に低くなり、生活世界の外部からもたらされる知識や制度が人びとの日常を規定するものへとになっていき、生活世界の空間とモノは共

的なものから私的なものに変化していった。そして、生活世界に対して人間が働きかけることのできる余地は縮小して相互排他的なものになり、その自立性と創造性の発露が妨げられる事態に至っているという。

加藤は、生活世界をあらためて共的なものとしてその自治を回復させるための方途として、人間同士の持続的な対面関係が存在する場と分かちがたく結びついた生身の人間同士によるコミュニケーションの力と、不文律的な慣習のなかにある倫理を問題にしている。それは、生活世界における共在者だけでなく、過去と未来の他者への想像力をともなうものとして措定される。つまり、私たち（共在者）だけでなくその先行者と後続者を想定した通時的概念と捉えることで、死者（過去）やこれから生まれてくる人びと（未来）への配慮（ある種のモラル）を含むことになる。この他者への想像力をともなう通時的な共有が、生活世界における人びとの視点を深化させ、新たな共的な世界の創造につながるという。

そのうえで、たんに伝承を人間の多様性・主体性・創造性と対立するものと見なし、個を称揚するような議論は要素還元主義に陥りかねないとし、丸山眞男や大塚久雄といった戦後の進歩的知識人（近代主義者）への批判へとつなげている⁴¹。

地域社会の自治は近代的自我を持つ「ばらばらの個人」の集まりによってなされるものではなく、歴史的深度を持って蓄積・共有されてきた知識・経験と、それとの兼ね合いでなされる人々の共同性に支えられてきたものではなかったか。

加藤の論調は、同じく近代主義者が描く民衆像への批判を企図した安丸良夫の議論との親和性を感じさせる。萌芽的ではあるが、歴史学においても生活世界概念の検討が始まっている⁴²。安丸は、歴史学分野においていち早く生活世界概念を援用していた⁴³。安丸は、日本の経験を問題としながら以下のように述べている⁴⁴。

戦争や革命や独裁などの猛威にもかかわらず継続しているのが民衆の生活世界であり、資本主義的世界システムと究極のところでは向かっているのはこの生活世界に他ならないと考える。（中略）十九世紀なかば以降の近現代世界史は、資本主義的世界システムが地球上のすべての地域で民衆の生活世界をこのシステムのもとに包摂し編成替えしていく過程としてとらえるものである。（中略）こうした過程全体の駆動力は資本主義なのだから、それが分析の基軸におかれるのは当然のことなのだが、しかしそのことは市場原理や利潤原則が私たちの生きる世界の全体に簡単に貫徹するというを意味していない。（中略）諸条件がその間にあって複雑な役割を果たしており、こうした諸条件・諸事情のなかで歴史的世界の具体相が論じられなければならない。しかし、こうした過程全体の限りない複雑さにもかかわらず、私はそこに（1）資本主義的世界システム、（2）民衆の生活世界、（3）国民国家という三つの焦点的分析次元が存在すると考えている。

木村哲也は、近著にて安丸良夫の民衆思想史の背後に宮本常一の影響があったとの注目すべ

き考察を展開している⁴⁵。今後は、歴史学と民俗学との新たな対話による生活世界概念の深化が期待される。矢田貝家調査プロジェクトによる歴史実践は、以上のような民俗学的な発想を採用しつつ取り組んだことに特徴がある。「山陰地域の生活世界を史学する」ことを想定して、その理念を以下のように歴史実践として具体化していった⁴⁶。

3. 矢田貝家調査プロジェクトの推移

(1) プロジェクトの前史と準備期間(2015年度)

矢田貝家調査プロジェクトの前史として、2011年から2013年にかけて計5回にわたる東京大学経済学部資料室の事業として概要調査が実施されている。調査日数21日で調査人員延べ112人、詰め替えた段ボールは105箱となり、総点数は約46,700点と概算されていた。2015年4月に筆者が島根大学法文学部に着任したことを契機に、本格的に島根大学と東京大学との共同研究体制が整い、島根大学法文学部山陰研究センターの研究事業としてプロジェクトが始動した。



伯耆町講演会(2016年2月27日)

2015年度は準備期間として、2回の東京大学での研究会(2015年8月20日、2016年2月4日)と1回の夏期伯耆町調査(2015年9月10日-12日)を実施してプロジェクトの基本方針を定めている。その方針は、以下の4点である。

- ①単純な伯耆地域礼賛を目的としない。
- ②地域色の強い特殊で希少な歴史資料発掘のみを目的としたプロジェクトではない。
- ③地域色の強い特殊で希少な歴史資料と同じほど、希少性のない普遍的な性格の強い歴史資料が伯耆地域に残されている意味を重視する。
- ④近代化によって現代では常識となっている事物や制度の形成過程を、伯耆地域の先人達の足跡に即して発掘する。

そして伯耆町教育委員会の協力のもと、2016年2月27日に講演会を開催して趣旨を説明し、地元の方々への参加を呼びかけた。2016年度以降は、基本的に年2回の東京大学での研究会と年1回の夏期伯耆町調査を継続的に開催している。

(2) 住民参加調査の開始

(2016年度～2019年度)

2016年度からは、基本的に毎月1回の住民参加調査を実施している。当初は、伯耆町古文書の会の会員だけでなくさまざまな方が参加していたので、崩し字が読めなくても従事できる史料撮影を行い、初年度の計10回の調査では総計3,582枚を撮影している。



住民参加調査 撮影調査の様子(2016年4月3日)

第1回住民参加調査の配付資料には大山の写真を使用した。大山(伯耆富士)が、水面に映って逆さ富士となっているものである。これを集まった住民の方に、「この写真はどこで撮られたのでしょうか」と問うと、多様な意見が噴出した。写真にはススキが写っていることから、これは春の残雪ではなく秋の初雪だとわかる。そして最終的には、柗水高原の初雪に地元住民の方々は着目し、「この角度で高原に初雪が見えるのはこの堤しか考えられない」などといった発言が多く出てくるのである。これこそ、我々が住民参加調査で求めている地元住民の記憶や生活感覚である。



紅葉と初冠雪 (C)鳥取県

住民参加調査とは、このような記憶や生活感覚といった、いわゆる「よそ者」の大学の研究者ではなかなか把握できない情報群の記録化を、歴史資料の整理・解読と共に進める調査手法である。呼び覚まされた人びとの記憶を記録化し、近現代史の展開構造と交錯させながら歴史の細部を捉える。そのような調査現場は、住民の生活感覚に根ざした会話が飛び交う賑やかな場となった。参加者は、高齢の方が多いが、どこにでもある明治・大正・昭和期の歴史資料は、個人的な記憶を呼び覚ます道具となる可能性を秘めている。また、旧住民にとっては懐かしいことも、新住民にとっては新鮮な驚きとなり、調査現場は新旧住民を交えた地域の近現代史と個人的記憶の交錯する場ともなっていた。そのような場は、今後の地域づくりの新たな方向性を模索するうえでも、重要なヒントを提供してくれるのではないだろうか。

2017年度から2019年度にかけては、史料撮影から「矢田貝顕造日記」の解読に変更して計25回の住民参加調査を実施した。矢田貝家住宅に膨大な近現代記録が体系的に残されたのは、戦後の岸本町において第4～6代の町長を務めた矢田貝顕造(1905～92)によるところが大きい。自身の日記を含めて、戦前・戦中・戦後にかけての極めて詳細な庶民生活記録が、生前の丹念な記録整理によって、同家の土蔵を中心に膨大に残されたのである。筆者は、庶民生活史的な歴史実践の素材として大きな可能性を感じるようになっていった。



住民参加調査 日記の読み合わせ(2017年5月20日)

「矢田貝顕造日記」は、1928(昭和3)年から1974(昭和49)年まで残されている。まさに戦前・戦中・戦後の庶民生活環境の激変が記録化された日記といえる。教科書的にいえば、昭和恐慌から、それに対応した農山漁村経済更生運動の展開。その後戦時体制に突入していくなかで、村からの出征兵士が増加。戦局の悪化と敗戦。戦後は日本の地主にとって大きな転機とな

る農地解放。徐々に民主化される農村の様子や高度経済成長。そして農業が近代化されることによって、農村から牛が消えていく。激動の巨大な生活変化が詳細な文字記録となっている。このような日記を地元の方々と解説すると何がわかるのか具体的に提示してみたい(句読点は筆者)。

1928(昭和3年)年1月10日

起床一〇。午前中立岩内藤ヨリ玄米六俵持参預ル。午後三時迄仮眠。鞍掛産母来ル。夜雑談。八時就寝。

大学で文字だけ解説している時には、文中の「鞍掛^{くらかけ}」の意味がわからなかったが、地元の方に聞けば即答であった。「鞍掛」とは、吉定集落に多い苗字とのことである。

1928(昭和3)年1月11日

起床七時。本日ハ珍ラシキ天気。平地ノ雪全ク消ユ。午前中畑田重利中島宗一二人ト下比良ノ藪ニテ雪持竹ヲトル。二十七八本。(中略)午後ハ重利宗市二人ニテ雪持ヲ直シ終ル。

筆者は、文中の「雪持竹^{ゆきもちだけ}」がわからなかったが、地元の方によれば、屋根に設置する雪止めのことであった。積雪地帯の生活が滲み出ている。これを知ると、午後の作業は屋根の上での作業といったイメージが具体的に立ち上がってくる。

1928(昭和3)年1月20日

二時過宗一ハ吉定ノ寺ヘ一男ハ銀行ヘ及ビ、飛田ヘ行カス。松江細田匿名組合ニ払込マントス。

地元の方にとっては、「吉定ノ寺」といえば瑞應寺である。そして「飛田」といえば、溝口町に古くからある病院だということはすぐわかるのである。ここでは、「飛田へ行カス」とは、病院代の支払いであったことを教えてもらうこととなった。

1928(昭和3)年2月4日

起床七時前。昨夜少シ夜更シテ今朝ネムシ。今朝起キ出ズル前ヨリ美世子シキリニ腹痛ヲ訴フ。モハヤ分娩ノ機ニテヤ。ニハカニ起キ出デタリ。(中略)女子ヲ目出度儲ケタリ。

1928(昭和3)年2月5日

(前略)使ニテ谷本鼻^{たにもとのかかあ}粉米一重持参ス。(後略)

娘が産まれた様子が綴られている。産まれた翌日に「谷本鼻^{たにもとのかかあ}」、つまりは近所の年上女性が米の粉を持参していることが記録されている。筆者には、何に使うのか想像がつかなかったのであるが、かつての暮らしを知る地元の方は、昔の粉ミルクと語った。年上女性は、子供が

産まれると必要になることをよく知っていて持参しているのである。筆者は、大いに納得させられた。大学で若い学生たちと文字のみ解説しているだけでは絶対に理解し得ない情報群が、確実に地元には存在している。

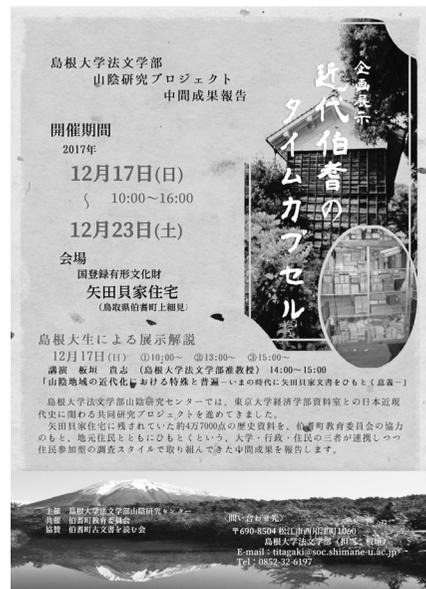
このように、住民参加調査とは、文字資料を補完する内容的な保存でもある。地名や人名、かつての暮らしの記憶や生活感覚。日常の生活にとって当たり前のことは、案外記録に残らないものである。やはり生活の歴史を正確に知るためには、生活記憶の記録化は不可欠で、記録に残された文字だけに依拠すると間違ってしまう危険性がある。このような《専門知》と《ローカル知》の融合は、庶民生活史にとって重要な調査手法といえる。

近現代史料群の持つ最大の可能性は、「よそ者(研究者)に価値付けられる地域」ではなく、「よそ者(研究者)に語る地域」といった、調査される住民側の主体性を喚起し、一方的でない関係性を構築できることにありと感している。前者が客体的な行為であるのに対して、後者は主体的な行為ともいえよう。近現代史料群には、何気ない身の周りの生活空間に対して、《住民自らの気付き》をうながす可能性がある。この《住民自らの気付き》は、日々生活する地域を見つめ直す契機となりうる。そして、このような近現代史料群は日本中どこにでも多く残されていることから、その活用モデルの汎用性は極めて高いともいえる。

(3) 企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」の開始 (2017年度～2024年度)

矢田貝家での住民参加調査は、島根大学法文学部の専門課程演習とも連動させて、学生教育の一環として取り組んできた。平成生まれのいまの大学生は、近代的な制度基盤をあたりまえのように享受して育ってきている。このような学生たちをデジタル世代と呼ぶならば、かつての暮らしを知る方々はアナログ世代ともいえるであろう。デジタル世代が、日々当然のように享受している近代的なものの背景には、それを求めてきた地域の人びとの連綿とした営みがあったのであり、そのことをデジタル世代が自覚することの意味は大きいと感じている。

矢田貝家住宅では2017年度より企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」を継続して開催し、学生たちによる展示解説の場を設けた。学生たちひとりひとりに史料と、政治・新聞・税制・教育・鉄道・銀行といった近代的な社会基盤を中心とするテーマを与え、史料を解説して背景を調査させている。



企画展示
「第1回近代伯耆のタイムカプセル」
チラシ

企画展示「近代伯著のタイムカプセル」の具体的な反響と多様な広がり的一端を紹介したい。

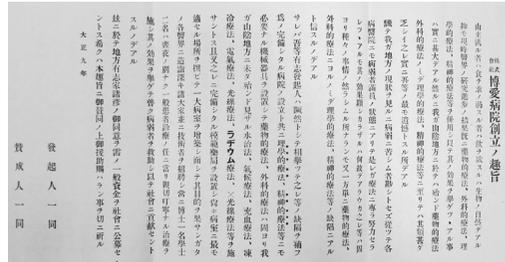
医療「1921年(大正10) 博愛病院の創立 西洋医学の普及と鳥取県の医療」

1883年に県立鳥取病院が県内初の公立病院として開院されると、1915年に日本赤十字社鳥取支部に譲渡され、日本赤十字社鳥取支部病院(現鳥取赤十字病院)が誕生した。これにより県下の大病院となり、中国地方では初めての赤十字病院の設立となった。一方、1891年に当時の県内の私立病院のなかでも比較的大規模な因幡病院(現鳥取県立中央病院)が作られ、明治期から大正前期は鳥取県東部に病院が集中する状態にあった。



展示パネル 医療

そのなかで1921年に県下では初めての株式会社組織の病院として博愛病院が開院した。開院にあたり西伯郡・日野郡の資産家が出資を行い、取締役社長に地元有力者の坂口平兵衛が就任した。当初は医員11名、薬剤師4名、看護婦23名、病室13(病床53)を超える地方には大規模な病院で、当時老朽化していた郡立米子病院を合併するべきとの意見もあったという。こうして鳥取県西部に待望の大規模病院が設立された。



博愛病院創立趣旨書

このパネルは第3回企画展示のものである。矢田貝家住宅での展示会場には、現在の博愛病院の理事長、院長、事務長が訪れて学生たちの展示解説を聞くという場面があった。博愛病院は、2021年に100周年を迎えることから、記念事業を考えていたようであった。現在の病院内には残存しない創立趣旨書が矢田貝家文書調査によって発見されたことは注目された。現在に至ってもなお地域医療に貢献する病院関係者に、この発見が喜ばれたことはいままでない⁴⁷。

福祉「藤岡吉平の社会救済事業と倉吉の因伯孤児院」

これらの手紙は、因伯孤児院の有志発起者から矢田貝家に宛てられたものである。因伯孤児院は、八雲数枝によって1906年に倉吉の妙寂寺内に私立因伯仏教孤児院として創設された施設で、現在の児童養護施設因伯子供学園につながっている。孤児院が創設されてから1912年に財団法人として認められ国や県から助成金を下付されるに至るまでに7年間を要しており、経営

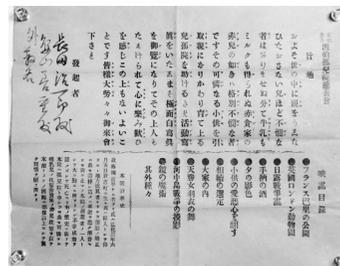


展示パネル 福祉

は困難を極めていたという。そのため、慈善活動写真会での収益で孤児院を助けることを目的に、因伯孤児院慈善会の有志らによる活動が行われていたと推察される。



因伯孤児院
慈善活動写真会招待券



因伯孤児院慈善会趣旨書

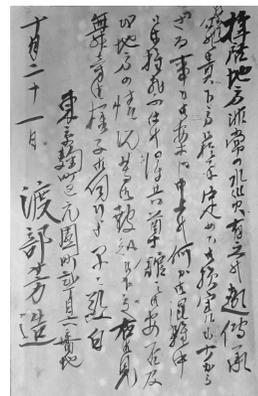
このパネルは第1回企画展示のものである。現在も倉吉市にある児童養護施設因伯子供学園は、地域の人びとにそれなりに知られている施設である。来場者のなかには、意外に古い歴史があることを知り驚きの声も多く聞かれた。普段は気に留めることもない何気ない養護施設だったのであろう。それを再認識させる力が歴史資料にはある。

災害「1893年(明治26) 鳥取大水害 倉吉町の水没」

この葉書は、鳥取県を襲った1893年の水害に関するもので、東京の麹町にいた伯耆国会見郡渡村出身の国会議員渡部芳造から矢田貝平重に宛てられた見舞状である。この大水害では、鳥取県全体で死者219人、行方不明者109人となり、県中央部の被害が甚大で、倉吉町では家屋全壊223戸、久米郡では死者95人にも達した。



展示パネル 災害



水害見舞状

このパネルも、同じく第1回企画展示のものである。一般的に、地域の災害展示に対する反響は大きい。倉吉市から企画展示を訪れた来場者からは、史料に出てくる地名や人名に関する詳細な情報を提供いただくこともあった。

企画展示の一端を紹介したが、地域住民の関心を引き寄せ思索に誘うものは、固有名詞である。医療ならば「博愛病院」。福祉でならば「倉吉の因伯孤児院」。災害でならば「倉吉町の水没」となる。大学の演習では、個別事例から考察を深めて「西洋医学の普及」といったような一般化・普遍化・抽象化して対象を捉えることを指導しているが、地元での企画展示においては、地域の固有性も提示することに留意した展示解説を作成させている。なによりも、歴史資料はたんに過去を明らかにする素材として存在するのみではなく、今を生きる人びとをつなぐ力も有していることを再認識させられた。

表1 第1回企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」 開催期間：2017年12月17日-23日

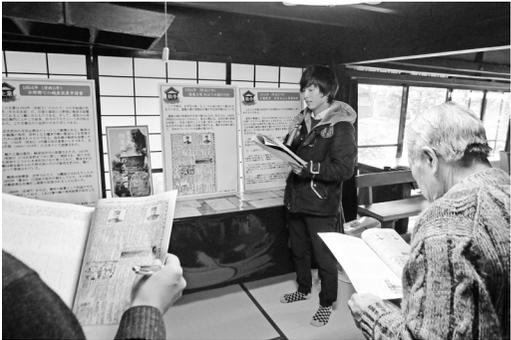
第1部 〈近代国家の政治空間〉		
政治	1893年(明治26) 自由党 板垣退助の鳥取県遊説	田村 修平(2回生)
新聞	山陰における新聞の移り変わり	志儀 俊樹(2回生)
税制	明治初期の酒税制度と政治運動への影響	田邊 達也(3回生)
第2部 〈近代的社会基盤の形成〉		
教育	1899年(明治32) 溝口分教場での身体検査	石橋 壮志(2回生)
鉄道	1912年(明治45) 米子での山陰鉄道開通記念博覧会	黒田 悠大(3回生)
銀行	山陰の銀行設立の広がりとは合併	田中姫都美(3回生) 吾郷 友希(3回生)
電気	山陰電気株式会社の設立 各地に広がる電柱	土橋 由奈(2回生)
ガス	1911年(明治44) 山陰瓦斯株式会社設立趣意書	室井 雅望(3回生)
福祉	藤岡吉平の社会救済事業と倉吉の因伯孤児院	阿部 史歩(2回生)
第3部 〈近代の災害と戦争〉		
災害	1893年(明治26) 鳥取大水害 倉吉町の水没	秋永 智宥(3回生)
戦争	1904年(明治37) 日露戦争 従軍兵士の軍事郵便	梶島 聡太(3回生)
戦争	1904年(明治37) 遼陽占領 松江での提灯行列	西島 有美(3回生)
第4部 〈伯耆地域の生活慣習〉		
生業	1854年(安政5) 日野郡での蠟座設置申請書	橋本 開(2回生)
水利	1887年(明治20) 尾高井手をめぐる水争い	吉藤妃花梨(3回生)
慣習	1905年(明治38) 親戚を招いての初宮参り	上本かなこ(2回生)
日記	1928年(昭和3) - 1974年(昭和49年) 矢田貝顕造日記に残る庶民生活の記録	板垣 貴志(准教授)
		
<p>学生によるパネルの準備(2017年12月15日)</p>		
		
<p>学生による展示解説(2017年12月17日)</p>		

表2 第2回企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」 開催期間：2018年12月16日-22日

第1部 〈近代国家の政治と地方自治〉

帝国議会	1890年(明治23)の帝国議会記念碑 明治期鳥取県の政党対立	海老谷昂輝(2回生)
祝祭日	1901年(明治34)の紀元節 祝祭日の制定と町村での奉祝	濱尾佳子吏(3回生)
税制	1890年(明治23)の建白書 伯耆地域の酒造家運動	上本かなこ(3回生)
地方自治	1911年(明治44)の村治表彰 日露戦後の模範村 西伯郡尚徳村	長廻 圭祐(2回生)
名望家	1906年(明治39)実力豪家財産録 山陰地域の名望家と家格観念	土橋 由奈(3回生)

第2部 〈近代的社会基盤の形成〉

新聞	1873年(明治6)米子新聞の発刊 山陰ジャーナリズムの黎明	田村 修平(3回生)
道路	1885年(明治18)出雲街道改修費 鳥取県の道路改修事業の展開	佐竹 竜弥(2回生)
消防	軽便消火器の販売 鳥取県の消防史とポンプの進化	藤田 拓人(2回生)
保険	徴兵保険株式会社米子代理店 徴兵保険の隆盛	永田 悠(2回生)

第3部 〈近代産業の展開〉

産米改良	1893年(明治26)の因伯米共進会 米穀検査の開始と産米改良	山岡 裕輝(3回生)
製糸業	山陰製糸株式会社の蚕種配布事業 養蚕の普及と製糸業の展開	石原 知夏(2回生)
林業	1915年(大正4)鳥取県山林会の設立 木材需要の増加と林業の展開	田村 奏(2回生)
畜産業	1911年(明治44)米子家畜市場の設立 畜産組合による市場経営の開始	橋本 開(3回生)
金融業	1914年(大正3)東京国債株式会社山陰支部の創立 証券業の活況	小割 陽哲(3回生)
自転車	1901年(明治34)の自転車購入 自転車の普及と取締規則の制定	宮廻 裕樹(2回生)

第4部 〈近代の災害と戦争〉

災害	濃尾地震と三陸大津波への義捐金 地震研究と防災啓発の始動	木原 奨郷(2回生)
戦争	米子での旅順陥落記念パノラマ展 観光地化する日露戦跡	青山 沙香(2回生)
徴兵	西伯郡大幡村での徴兵検査 身体検査による兵役種の選別	石橋 壮志(3回生)

第5部 〈伯耆地域の生活慣習〉

治水	1862年(文久2)の嘆願書 難航した佐野川開鑿事業	諸田 道旭(2回生)
名所旧跡	1906年(明治39)鳥取県の旅行案内 南朝正統論と名所旧跡の形成	志儀 俊樹(3回生)
紐落とし	ご祝儀の鱒 紐落としのお祝い 山陰地域の子供の成長儀礼	西久保秋音(2回生)
形見分け	形見分けのお礼状 故人の遺品分与と親族紐帯	長谷川佳祐(2回生)



パネル作成記念(2018年12月14日)



展示準備の様子(2018年12月15日)

表3 第3回企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」 開催期間：2019年12月15日-21日

第1部 〈近代的国家制度と政党政治の胎動〉

税制	1887年(明治20) 所得税の創設 軍事費の膨張と富裕層への課税	吉川 静流(2回生)
徴兵	1894年(明治27) 一年志願兵官費服役願 国民皆兵へ向けた制度拡充と徴兵忌避	木原 奨郷(3回生)
警察	1901年(明治34) 溝口新庁舎の建設 近代警察の成立と国民生活への介入	諸田 道旭(3回生)
政党	1915年(大正4) 立憲同志会鳥取県支部発会 非政友会派の糾合と政党政治の地方波及	桐山 満喜(2回生)

第2部 〈近代的社会基盤の形成〉

医療	1921年(大正10) 博愛病院の創立 西洋医学の普及と鳥取県の医療	長廻 圭祐(3回生)
教育	1885年(明治18) 幻の米子中学校建設 学制・教育令の推移と地元篤志家の寄付	大島 直樹(2回生)
鉄道	1918年(大正7) 伯備線沿線の土地買収 鉄道網の拡大と鉄道教習所の設置	長谷川佳祐(3回生)

第3部 〈近代社会の矛盾と生活扶助の拡大〉

福祉	1906年(明治39) 大阪小林授産場への寄付 社会福祉事業の拡大と民生委員制度の萌芽	藤田 拓人(3回生)
日本赤十字	1896年(明治29) 日本赤十字社へ入会 日清戦争から始まる国外での戦時救護活動	石原 知夏(3回生)
愛国婦人会	1915年(大正4) 愛婦鳥取県支部の慰問 銃後の軍事援護活動と女性の社会進出	青山 沙香(3回生)
米騒動	1918年(大正7) 鳥取県の米騒動 寄付による米の廉売と騒動の終息	田村 奏(3回生)
災害救済	1914年(大正3) 大正桜島大噴火 近代的な災害救済と民間義捐金の恒常化	江口 智敦(2回生)

第4部 〈近代産業の発展と農村社会の変化〉

産業組合	1912年(大正元) 大幡村産業組合事業報告 産業組合による制度的農村金融の整備	海老谷昂輝(3回生)
倉庫業	1918年(大正7) 伯耆農業倉庫業務規程 農業倉庫の設置と産業組合による共同販売	向山 歩鋭(2回生)
肥料	1917年(大正6) 大豆粕と硫酸の購入 満州大豆粕の輸入から化学肥料の時代へ	佐竹 竜弥(3回生)
牛乳	大正期の牛乳配達 搾乳業者の出現と栄養補助的な牛乳摂取	宮廻 裕樹(3回生)
百貨店	明治期 大都市呉服系百貨店のカタログ 通信販売の拡大と百貨店の地方進出	脇本日向子(2回生)



パネル作成記念(2019年12月13日)



展示解説(2019年12月15日)

表4 第4回企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」 開催期間：2021年12月19日-26日

第1部 〈国家制度の近代化と国策の展開〉

鳥取県再置運動	1876年(明治9) - 1881年(明治14) 大島根県時代と鳥取県再置運動の展開	恒松 杏(3回生)
士族授産	1876年(明治9) 鳥取士族の払下げ地売却 秩禄処分 of 断行と士族の困窮	大屋 裕輝(2回生)
在郷軍人会	1913年(大正2) 帝国在郷軍人会大幡村分会 兵卒の給源 農村部での在郷軍人会活動	和田 直樹(2回生)
戦時国債	1905年(明治38) 日露戦時の国債募集 戦費調達のため国債の増発	高倉 雄太(3回生)
生活改善運動	1910年(明治43) 東久世伯耆遊と揮毫雅会 生活改善運動による骨董趣味の排撃	松本 拓(2回生)
政党	1913年(大正2) 若槻礼次郎の米子遊説 立憲同志会の結党と政党政治の活発化	前田 翔天(2回生)
海外移民	1926年(大正15) 鳥取県海外協会の設立 国策によるブラジル移民送出の推進	山本 舞桜(2回生)

第2部 〈近代的社会基盤の形成〉

医療	1898年(明治31) 大幡村隔離病棟の建設 コレラ対策と公衆衛生の啓蒙	久保田春菜(3回生)
衛生	1913年(大正2) 日葉の無料進呈案内ハガキ トラホーム撲滅対策と学校衛生の強化	足立 真唯(2回生)
児童福祉	1912年(大正元) 鳥取育児院の慈善大会 児童福祉の黎明と養護施設の運営	常 明星(留学生)
電気	1921年(大正10) 電気アイロンの購入 電気事業普及に貢献したアイロンの国産化	田中 陸(2回生)
ガス	1913年(大正2) 山陰瓦斯株式会社の合併 木炭優勢のなかでの山陰のガス普及	久保田春菜(3回生)

第3部 〈近代産業の発展と展開〉

製氷業	1913年(大正2) 米子 共同氷営業の集會 人工製氷の誕生と天然氷との競争	高倉 雄太(3回生)
麦酒	1909年(明治42) ビアホール白水亭の開店 ビール国産化の進展と麦酒税の導入	恒松 杏(3回生)
古着	米子 新三好古着店との取引 伝統的古手市場から近代的紡織維業の展開	金阪 桃花(2回生)
梨	1918年(大正7) 山陰梨株式会社による出荷 梨の主産地形成と共同出荷体制の構築	佐々木 彩(3回生)
煙草	1988年(明治32) 煙草専売法の運用 煙草専売への移行と鳥取煙草の盛衰	越道 大耀(3回生)

第4部 〈近代的な社会生活の諸相〉

風呂	1926年(大正15) 細山式保温浴槽の発注 関東大震災経験を契機としたガス風呂の普及	佐々木 彩(3回生)
登山	1898年(明治31) 富士山登頂の便り 近代登山と学術研究・高層気象観測の開始	山中 智哉(2回生)
義足	1915年(大正4) 義足調製の勧誘ハガキ 傷痍軍人の増加と障害者スポーツの発展	上田野々香(2回生)
温泉	米子 皆生温泉の開発 近代の温泉開発と観光地の発展	谷 穂乃香(2回生)
野球	1926年(大正15) 松江高校応援団の寄附願 野球人気の隆盛と学校応援団の形成	越道 大耀(3回生)



パネル作成記念 (2021年12月17日)



パネル作成記念 (2020年12月18日)

表5 第5回企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」開催期間：2022年12月18日-25日

第1部 〈近代国家による社会集団の再編成〉

- 社会福祉 1912(大正元)年 京都救済院への浄財寄附 感化救済事業の展開と教化的な良民育成 大屋 裕輝(3回生)
- 青年団 1929(昭和4)年 大幡村青年団の総会案内 伝統的な青年集団の国策による再編成 藤井 陽也(2回生)

第2部 〈民間事業の拡大と社会公益の追求〉

- 交通 1928(昭和3)年 米子自動車株式会社の発足 鳥取県でのバス事業展開と公益性の追求 新里 月(大学院)
- 職業紹介所 1930(昭和5)年 米子職業紹介所の女中幹旋 労働市場の拡大と職業紹介の公益事業化 足立 真唯(3回生)
- スイカ 1940(昭和15)年 大山すいかの贈答 鳥取県でのスイカ栽培の普及と特産化 秋末晋太郎(3回生)

第3部 〈帝国日本の対外進出〉

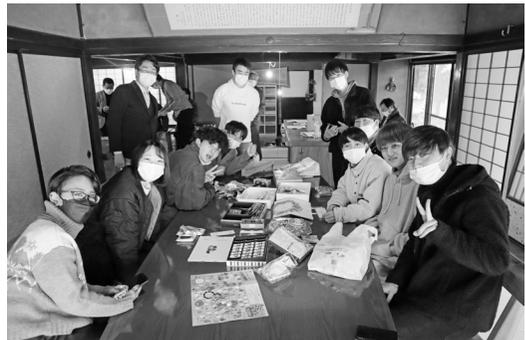
- 航空機 1938(昭和13)年 米子航空機乗員養成所 大陸への航空路拡大の中継地 原 慎之輔(2回生)
- かやいらす かやいらす(蚊取り線香)の販売チラシ 除虫菊の軍需物資化と輸出拡大 山中 智哉(3回生)
- 朝鮮大豆 1899(明治32)年 朝鮮大豆の購入 外地での農業介入と帝国日本の分業体制 岡田 晃(3回生)
- 水産業 日露戦後 大日本水産株式会社発起趣意書 帝国日本の漁業進出と内地への水産物供給 金阪 桃花(3回生)

第4部 〈文化発展と情報・教育統制との軋轢〉

- 図書館 1929(昭和4)年 県立図書館の建設賛同依頼 図書館の整備と言論・思想の文化的発展 和田 直樹(3回生)
- 蓄音機 1912(明治45)年 蓄音機とレコードの営業 蓄音機の普及と標準語教育への応用 田中 陸(3回生)
- ラジオ 1927(昭和2)年 日本放送協会中国支部の設立 ラジオの誕生と戦時中の情報統制 前田 翔天(3回生)



パネル作成記念(2022年12月16日)



展示解説の合間(2022年12月18日)

表6 第6回企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」 開催期間：2023年12月16日-23日

第1部 〈昭和恐慌の深刻化と社会の対応〉

鮎	1932(昭和7)年 大幡村 鮎出荷組合の創立 河川資源の動員と共同出荷の模索	山本 暁世(2回生)
餌	1933(昭和8)年 養鶏の拡大と飼料購入 満州からの飼料供給と農業の多角化	山田 優太(2回生)
国立公園	1936(昭和11)年 大山国立公園の指定 不況対策による景勝地の観光資源化	大島 直樹(大学院)
砂防	1933(昭和8)年 溝口町 登山橋砂防工事 国庫補助による農村救済と地方財政の変容	朝見 光彦(2回生)
更生運動	1936(昭和11)年 経済更生委員会の開催 自発性の喚起による農村の組織化と再編	藤井 陽也(3回生)

第2部 〈国民教化の制度と観念〉

敬老	大幡村婦人会 敬老会の開催 家族制度の廃止と敬老思想の変容	中村 恭子(2回生)
史蹟顕彰	1926(大正15)年 船上山史蹟保存会の設立 日露戦後の史蹟顕彰と国民教化	中村 秀汰(大学院)

第3部 〈病の恐怖と対策〉

チフス	チフスの大流行と感染症予防 公衆衛生の啓発と改良便所の普及	長野 天音(3回生)
ハンセン病	1937(昭和12)年 鳥取県癩予防協会の創立 無らい県運動による隔離と差別	水元 健太(2回生)

第4部 〈総力戦体制下の地域社会〉

修学旅行	戦時期における伊勢神宮への修学旅行 地域社会に共振する国家意識の高揚	山田 尚樹(2回生)
万年筆	1937(昭和12)年 米子市での万年筆購入 大衆化する万年筆と軍需への転用	原 慎之輔(3回生)
鳥取地震	1943(昭和18)年 鳥取地震と情報統制 厭戦感情への警戒と噂の拡散	瀧口 翔(2回生)



パネル作成記念(2023年12月15日)



展示解説を終えて(2023年12月16日)

表7 第7回企画展示「近代伯耆のタイムカプセル」 開催期間：2024年12月14日-24日

第1部 〈政治・経済の近代化と変容〉

鉄道	1928(昭和3)年 伯備線全通式 鉄道の延伸と悲願の陰陽連絡線の開通	石 紫鵬(大学院)
海水浴	昭和期 東伯郡の叔母より海水浴の誘い 医療目的から行楽へ 鉄道会社の海水浴場開設	木瀬 春香(2回生)
パン	1939(昭和14)年 米子市でのパン屋開業 軍事的要因によるパン食推進政策と普及	三浦 凜花(2回生)
小作争議	1927(昭和2)年 山陰土地株式会社の創立 小作争議の拡大と地主的な温情主義の限界	堀江 純平(3回生)
警防団	1938(昭和13)年 鳥取県防犯協会発会式 警防団の発足と国民防空体制への動員	瀧口 翔(3回生)

第2部 〈農林水産業の近代化〉

病害防除	昭和期 溝口町でのいもち病対策 病害防除技術の発達と農業散布の啓蒙奨励	熊野 友洋(2回生)
井戸	1930(昭和5)年 瑞応寺境内での井戸掘鑿 農村での水利用 衛生改善と農業用水の確保	平松 駿一(2回生)
釣糸	昭和期 淡路島製テグス釣糸の通信販売 天然テグス産業の展開と販売網の拡大	兒山 颯汰(2回生)

第3部 〈女性の教育と社会進出〉

女学校	1935(昭和10)年 米子高等女学校 校舎増築 女学校の拡充と良妻賢母教育の徹底	永澤 瑠奈(2回生)
かまど	1927(昭和2)年 火王燃焼器の案内書 かまどの進化と女性労働の合理化	吉川 郁(2回生)
国防婦人会	昭和期 国防婦人会 大幡村支部発会式 総力戦体制と銃後女性の組織化	河村 智子(2回生)

第4部 〈スポーツの地方波及〉

テニス	昭和期 山陰青年庭球大会 スポーツ奨励政策の積極化と地方への波及	立畑 泰征(2回生)
運動会	1933(昭和8)年 大幡校秋季大運動会 余興的な運動会のはじまりと地方波及	松田 音夢(3回生)

第5部 〈文化・芸術の地方波及〉

将棋	1934(昭和9)年 溝口町での将棋大会 将棋の商業化の進展と将棋界のプロ組織化	山田 優太(3回生)
道具市	1937(昭和12)年 米子市公会堂での道具市 骨董愛好家の増加と真贋判定の科学化	岡田 和華(2回生)
庭園植樹	1926(大正15)年 尚花園植物場出荷案内状 日本庭園の変化と記念植樹の普及	富田 大喜(2回生)
彫刻	1942(昭和17)年 辻管堂書簡 彫刻作品案 日本美術の確立と対外的な文化戦略の展開	朝見 光彦(3回生)



パネル作成記念(2024年12月6日)



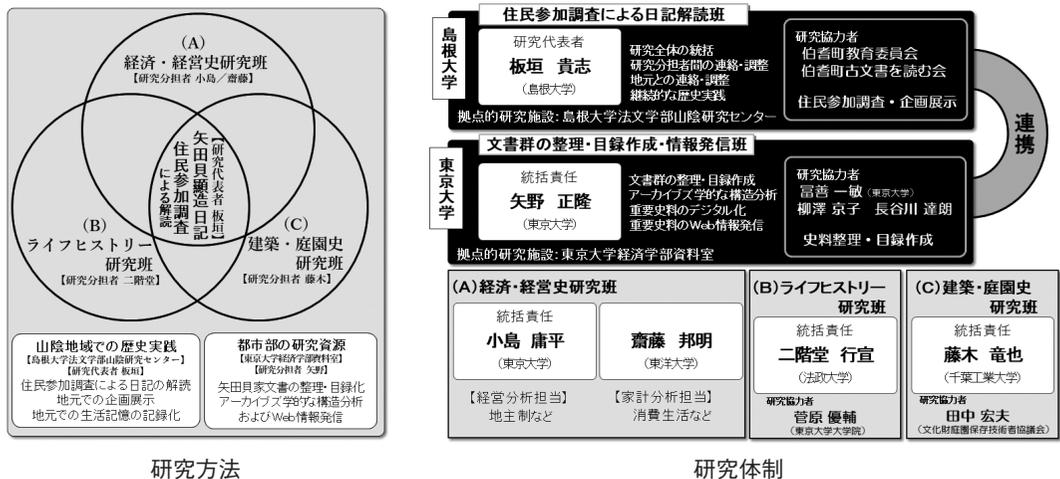
展示会場の様子(2024年12月14日)

(4) コロナ禍による中断 (2020年度～2021年度)

2020年の春より新型コロナウイルスの蔓延によって、調査プロジェクトは中断せざるを得なくなった。感染対策を万全にしたうえでも、2020年度から2021年度にかけての住民参加調査は4回しか実施できなかった(2020年10月17日、11月21日、2021年10月23日、11月27日)。また、2020年度後期授業期間の演習は、パネルのみ作成して、2021年度のものとともに2年分を第4回の企画展で展示した。

(5) 科研費による研究体制へ (2022年度～2025年度)

2022年度より科学研究費補助金(23K21959 基盤研究B「矢田貝家文書を活用した近現代山陰の農業・農村史研究と歴史実践」)を取得して、本格的な学術研究体制を構築した。研究班を5班に編成して、総合的に共同研究を進めていく体制とした。「住民参加調査による日記読班」および「文書群の整理・目録作成・情報発信班」を中核に据えて、「(A)経済・経営史分析班」、「(B)ライフヒストリー研究班」、「(C)建築・庭園史研究班」が各テーマを追究していく形をとっている。



従来の日本近代の名望家アーカイブズ調査研究には、個人の家計・日記史料を用いた事例研究として、中村隆英等による家計簿分析⁴⁸や中西聡・二谷智子による消費生活分析⁴⁹があり、近代日本の消費生活史は経済史学会でも注目を集めつつある⁵⁰。しかし、これらの研究動向には「家」のライフヒストリーへの視角が弱く、家族の結婚や出産、子供の進学といったイベントと消費生活との関連性などが解明すべき研究課題として残されている。また、建築・庭園史の研究者も加わることで、現代に残されている建造物や庭園の形成過程や、その背景にある当該期の美意識をも分析対象とすることに本研究の大きな特徴がある。

また、科研費による研究を推進するにあたって、「矢田貝家調査プロジェクト」の翻刻を進める検討会を組織した。日記は当初、筆者が中心となって地元伯耆町の方々と作業を進めていたが、2022年度からは島根大学大学院生の大島直樹が翻刻を担当し、その内容をオンラインの翻刻検討会

にて協議する方式とした。翻刻検討会には、筆者と大島および富善一敏、柳澤京子が参加した。現在、1928年から1941年までの翻刻とその内容精査が完了している。

コロナ禍が過ぎ、科研費による研究体制も確立した。しかし、肝心の住民参加調査の方は、コロナ禍以前のような盛り上がり欠けて不調になっていった。主宰する筆者にも大きな違和感があり、2022年度と2023年度には4回しか開催していない(2022年10月15日、11月19日、2023年10月21日、11月18日)。その最大の要因は、戦前生まれの高齢者参加者が減ったことにある。また、従来は一緒に日記をゆっくり読み合わせていく形の住民参加調査であったものを、専門的な研究者による翻刻検討会を経て、そこでの疑問を地元で問う形にしたことで、調査の場が一方通行的な雰囲気となったこともあろう。昭和初期の矢田貝顕造日記の内容は、もはや参加者にとっても記憶するところではなく、事前に行っていた翻刻検討会での疑問点を解決できる場にもなり得なかった。

本論集に掲載している住民参加調査座談会での妹尾千秋さんの発言は、この間の住民参加調査の大きな変化を的確に捉えたものとなっている。

始まった頃は、古文書の会員の外にもいろいろな方がおられました。10年前には私より10歳以上も年上の方と日記などの資料を一緒に読んでいたこととなります。その当時、私のもっぱら聞き役で、よう知っちゃうなあと感心しながら聞いておりました。そのうちに年を経るごとに高齢のため来られない方がだんだんと増えてきました。(中略)板垣先生がこのプロジェクトに地元の我々を呼ばれたのは、矢田貝家資料を読むと地元の方ではないと分からない地名とか風習、人名や言い伝えなどが出てくる。それを一緒に読みながら教えて欲しいということであったと理解しています。これらはどこかの本を調べれば分かるといったことではなく、日頃より見たり聞いたり経験したりした日常生活の諸々を語ることを意味しています。私は86才になりますが、昭和20年終戦の年は5才でした。玉音放送も聞きましたし、農地解放前の倉屋(矢田貝家の屋号)も覚えています。5才の記憶は一生残るといわれていますので、昭和20年頃からの諸々は自信を持って語れますが、それ以前の戦前のこととなると正直分かりません。私より10年前に5才になられた方は昭和10年頃からの見聞きした諸々を語ることができます。このプロジェクトが始まった10年前には諸々に詳しい方が何人もおりましたが、今は私が最後の一人となりました。もう一度再会をの声もありますが無理です。諸々を語れる住民がおられません。その意味でも今回のプロジェクトはラストチャンスをうまく切り抜けられたこととなります。

皮肉なことに、科研費による研究が開始した頃には、昭和初期の地元を語る側の住民の参加者が減ってしまっていた。一方で、学術研究の推進を図るために従来の歴史実践の方式を変更したことで立ち行かなくなった側面もある。学術的な研究費には期限がつきものであるが、歴史実践と学術研究との両立の難しさを感じる。

4. 山陰地域の近代経験を帰納的に理解していくために

あらためて歴史学固有の蓄積(学史)と作法(方法論)から導き出される社会貢献のあり方と、今後の地域をフィールドにした日本近現代史研究の方向性を考えていきたい。

永原慶二は、何のための個別研究か、何のための考証かという歴史学の今日的有用性に対する自省と懐疑は史学史のなかで繰り返されてきたと指摘している⁵¹。極めて独善的ではあったが、かつての皇国史観もいわゆる《役に立つ歴史学》を自認していたことの意味は重い。歴史学にとって、短絡的に今日的有用性を強調する姿勢には危険が孕んでいることを忘れてはならないだろう。また、遅塚忠躬は、「歴史学の営みの目的は結局のところ、読者に思索の素材だけを提供し、読者を思索に誘うこと」にあり、「書き手と読み手の双方が、ともに思索を凝らしつつ、ともにわれわれの社会的自己認識を深めることに」あるとした⁵²。戦後歴史学の碩学、永原と遅塚が残した言葉を後学の私たちは真摯に受け止め、未来に向けて発展的に継承していかなければならないだろう。

日本近現代史研究は、その対象領域とする時空間が現在の日本社会と近いため、歴史学のなかでもとりわけ現状分析と歴史分析の結合が自覚的に目指されてきた。かつて中村政則は、戦後歴史学のなかで大きな影響を持っていたマルクス主義講座派的な総合の三つの特徴として、「一般と特殊の統一的把握」、「政治と経済の統一的把握」とともに「歴史分析と現状分析の結合」があると指摘している⁵³。また、その継承を念頭に高岡裕之は、歴史分析と現状分析との乖離が極めて顕著となっている閉塞状況を憂い、「歴史科学の原点に立ち帰り、「現在」の「社会」的課題から出発することこそが、戦後歴史学の「遺産」を継承することであり、歴史科学再生への道」であると今後の研究の方向性を説いた⁵⁴。筆者も、日本近現代史研究がそのような姿勢や問いを完全に放棄し、現代の社会的課題に対する関心を喪失してはならないと考えている。

しかし、日本社会も明治初年から150年以上が経過し、これまでの近代経験を生活に根差して歴史学的に再考する段階に立ち至っているのではないかと感じる。矢田貝家調査プロジェクトの住民参加調査でも、昭和戦前期を語る参加者が減っていった。日本の近代(モダン・modern)は、まさに歴史化しつつある。矢田貝家調査プロジェクトでは、名望家の近現代資料群(日本近代の名望家アーカイブズ)の詳細目録化を目指したが、これは日本近現代史研究が、前近代史研究と史料調査方法的に同地平になりつつあることも意味している。

また、本総論では「住民参加調査」と記述してきたが、当初は「市民参加調査」を呼んでいた。当初の構想では、多様な市民参加を目指していたが、現実には地域住民の文化活動の域を超えていくことはなかった。「市民」の用語が上滑りしている感覚があったため、「住民参加調査」と言い換えていった経緯がある。民俗学的な発想を積極的に援用しつつ、山陰地域の近代経験を理解することをプロジェクトの目標に定めてからは、戦後啓蒙の流れを汲む市民社会の成熟を目指す歴史実践とは、自ずから理念的な方向性が異なっていたように感じている。

山陰地域での「住民参加調査」を継続するなかで、参照すべき先行事例に気付くことができた。家政学者溝上泰子の生活論である⁵⁵。溝上が実践した農村生活研究スタイルは高く評価されつつある⁵⁶。欧米からの輸入理論を演繹的に近現代日本に当て嵌めてきた研究系譜とは異なる

り、日本近代の経験を帰納的思考を通じて理解し直す溝上の研究手法の系譜に、矢田貝家調査プロジェクトを位置付けたいと思う。

中村政則は、戦後歴史学は日本の特殊に傾きがちであったことを踏まえ、近代そのものへの関心が1970年代から始まり、1990年代から普遍を強調する傾向が目立ってきたと指摘した⁵⁷。そして、両者の問題意識の違いを、「近代化と近代性」という認識の枠組みを使って説いている。近代化(モダニゼーション modernization)とはプロセスを表し、近代性(モダニティ modernity)は状態を表す。むろん中村の主眼は、「近代化なしに近代性はない」という言葉に集約されるようにポスト・モダニズム研究批判にある。しかし、近代(モダン modern)の歴史化が進展している現在、「近代性」が含意する領域は、なにもポスト・モダニズムによる「思想史や文化史で有効性を発揮する概念」⁵⁸にとどまらないのではないだろうか。

筆者は、「近代化と近代性」という認識の枠組みを山陰地域の近現代史研究に落とし込み、中村とは異なる文脈で捉えることもできるのではないかと考えている。「近代性」は、プロセス(過程)を解く「近代化」とは異なり、「近代経験」そのものを対象化できる概念である。たとえば従来の山陰地域における近代化的な研究では、裏日本や過疎化、地域格差が問題化されていた。対して、近代性的な研究は、近代経験の意味が問題化することになる。主語と主題の相違を表現すると、「日本／山陰地域の近代化過程を明らかにする研究」と「近代日本／山陰地域の経験の意味を問う研究」となろう。そのような認識の枠組みを踏まえるならば、矢田貝家調査プロジェクトは、山陰地域の近代経験を住民とともに問い考える歴史実践だったといえるのかも知れない。

そのうえで、従来の過疎研究が警鐘を鳴らしていたことは、いまや日本の現実となっていることを指摘しておきたい⁵⁹。

過疎問題はマイナーな問題ではなく、現在の早い時期に、都市と農村、非過疎地と過疎地といった区分なく、少子化・高齢化は日本列島全体の問題になることが予想される。

人口減少は、もはや国内の格差問題を越えた社会問題となっており、山陰地域を起点に地域格差を殊更に問題化する研究の意義は、相対的に低くなりつつある。過疎問題は全国化し、それへの対抗を企図した地域活性化も全国展開している。高岡裕之は、いち早くこの問題にコミットし、「人口の持続的増加が自明視されていた時代そのものが、もはや総体として再検討されるべき」過去となっていると指摘していた⁶⁰。

取捨選択の遠近法が求められる人口減少社会のなかで⁶¹、社会の縮小ではなく成熟を目指すためには、そもそもの存在意義を問う、つまりは「生活世界を史学する」営みの持つ意義は大きくなっている。近代的な生活基盤でいえば、電気、ガス、水道、道路、医療、福祉、金融、保険など、むろん目に見えない、近代的な普遍的価値、民主主義、自由、人権、平等、平和、法の支配、生存権なども含まれよう。これらが無かった時代を知る世代が減少していく時代に、その形成動機や社会状況を復元して再度自覚的に学ぶ意義は大きい。地域に残る近現代史料群からは、当時の人びとの考えや思いを知ることができる。そのようなまなざしは、生活世界を

形成してきたより多くの人びとの営みと努力を歴史叙述の俎上にのせていくことに結実していくであろう。

おわりに

現代社会は、ますます複雑化、高度化して専門化も進展している。社会問題の解決策も一筋縄ではいかない。迂遠な手法かも知れないが歴史学は、それら複雑に絡み合った現代の社会問題を解きほぐして、その解決に向けた糸口を提供できるという淡い期待を持っている。それは、いまに至る生活世界を史学し、その形成過程を紐解きながら身の周りの生活環境を見つめなおすことから開始されるべきではないだろうか。

歴史資料は、今を生きる人びとをつなぐ可能性を有しており、その可能性を発展させていく実践が求められている。それは、現代社会への切実な関心にもとづく新たな「歴史分析と現状分析の結合」を生み出す方向性であらねばならない。過去を取り扱う専門家は、あくまでも現代社会のなかで生活している自覚を忘れてはならないであろう。

昨今は、やたらと地域的個性が求められ、歴史学研究には特殊で希少なものを求められがちである。それはわかりやすいまちづくり活動の素材にもなる。したがって、一般的に地域色の強い特殊な歴史資料が注目される傾向にあることは否めない。そのような研究を貶める意図はまったくないが、たんに地域特性、地域差にもとづく個性を言いつのるだけでいいのであろうか⁶²。本来の地域の歴史研究とは、過去を正確に認識するために取り組まれるべきで、安直な地域礼讃とならぬようにする必要がある。中山間地域にいま必要なのは、ふるさと万歳といった空元気の三唱ではなく、これまでの歩みを正確に理解して、これからの歩みを正しく展望することにあるように思えてならない。日本各地に膨大に残されている近現代史料群は、現代人には平凡に感じられる身の周りの近代的制度、まさに現代社会の土台の形成過程を、地域の先人達の足跡に即して明らかにできるものである。自分たちの身の周りにあるありふれた希少性のない近現代史料群に光をあてていく意義は大きい。身の周りの生活環境の大きな変化の記憶を記録に留め、それがいまの日常生活にどのようにつながっているのか明らかにするような日本近現代史研究が必要とされている。とりわけ中山間地域での歴史研究の視座として重要ではないだろうか。

文化財住宅は、地域に根ざした文化活動に活用され、時間と空間を越えた人間どうしの《対話の場》の拠点となることで、本来の価値を発揮することができる。歴史学を含む人文学とは、人間を対象とした学問分野である。そのような人文学にとって、人間どうしの対話(コミュニケーション)を重視することは基本のなかの基本であろう。そのような《対話の場》を提供して入れる文化財を、住民・行政・大学の三者が連携してともに「遊び心」を大切にしながら育んでいくような歴史実践を、未来に向けて作っていかなければならない。

注

¹ 筆者によるこれまでの実践報告には、兵庫県内での取り組みを紹介した、拙稿「近現代資料活用論―野の学問の実践構築に向けて―」(『山陰民俗研究』第20号、2015年)と山陰地域での取り組みを紹介した、

- 拙稿「矢田貝家文書を活用した実践的な日本近現代史研究—住民参加型調査の可能性—」（筆者ほか編『地域とつながる人文学の挑戦—山陰の文学・歴史学・考古学研究から考える—』今井出版、2018年）がある。その後の実践を積み重ねる過程で考察を深めた部分もある。いまから振り返ると、拙稿（2015年）では、歴史資料保存活動と現状のまちづくり活動を素朴に直結させすぎていたように感じている。その他では、兵庫県三木市での講演記録（拙稿「市史編さんとまちづくり」『市史研究みき』第1号、2016年）と全国の実践報告動向を整理した論考（拙稿「史学・経済史学の研究動向」『年報 村落社会研究』第52集、2016年）がある。本総論の内容や主張と重複する箇所があることを断っておきたい。
- ² 鳥取県学務部学務課編『鳥取県郷土史』（1932年）。1973年に名著出版により再版されている。第6編「現代史」は1128-1458頁。
 - ³ 米子市役所編『米子市史』（1942年）。1973年に名著出版により再版されている。
 - ⁴ 鳥取県編『鳥取県史』（鳥取県、1969年）。近代は、第1巻 総説篇、第2巻 政治篇、第3巻 経済篇、第4巻 社会篇 文化篇となっている。
 - ⁵ 松村英男編『鳥取百年』（毎日新聞社、1968年）。
 - ⁶ 日本海新聞編集局編『郷土とっとり 激動の100年 教育・文化・風俗・軍事編』（日本海新聞社、1968年）。
 - ⁷ 松尾茂『鳥取明治大正史—新聞に見る世相—』（国書刊行会、1979年）。同『鳥取昭和史—新聞に見る世相—』（国書刊行会、1975年）。
 - ⁸ 内藤正中・真田廣幸・日置左衛門『鳥取県の歴史』（山川出版社、1997年）。
 - ⁹ 錦織勤・池内敏編『街道の日本史37 鳥取・米子と隠岐—但馬・因幡・伯耆—』（吉川弘文館、2005年）。
 - ¹⁰ 中国電力株式会社エネルギー総合研究所編『鳥取県を中心とした産業発展の歴史』（中国地方総合研究センター、2015年）。
 - ¹¹ 鳥根県教育会編『鳥根縣誌』（鳥根県教育会、1923年）。1977年に世界聖典刊行協会により再版されている。
 - ¹² 鳥根県学務部鳥根県史編纂掛編『鳥根県史』第9巻（鳥根県、1930年）。1972年に名著出版により再版されている。
 - ¹³ 筆者は、1948年から1953年かけて実施された鳥根県内の近世庶民史料調査事業を検討したことがあるが、その後の地域史研究にほとんど継承されない性格のものであった。詳細は、拙稿「鳥根県内における近世庶民史料調査」（渡辺浩一研究代表者『社会転換期における地域アーカイブズ全国調査の検証と新たな方法の開拓 研究報告書』2025年）を参照されたい。
 - ¹⁴ 中国地域社会研究会編『大根島—生態と課題—』（関書院、1956年）、同編『山陰農村の社会構造』（東京大学出版会、1959年）、同『漁村社会学の研究』（大明堂、1965年）、同編『三瓶山周辺の社会と文化』（大明堂、1966年）、同編『後進地域の社会と文化』（大明堂、1966年）、同『農村研究の軌跡』（大明堂、1976年）。
 - ¹⁵ 『新修鳥根県史編纂余録』（鳥根県、1968年）。
 - ¹⁶ 鳥根教育科学研究会編『鳥根の近代史—民主主義運動のあゆみ—』（鳥根県教育科学研究会、1968年）。
 - ¹⁷ 内藤正中編『近代鳥根の展開構造』（名著出版、1977年）。各章は、内藤正中「資本主義確立期における地方自治制度—鳥根県安濃・邇摩両郡の場合—」、同「日本近代における産業化の展開過程」、同「資本主義確立期における地方勧業政策」、藤沢秀晴「明治二十一年の農事調査—平田地域を中心にしながら—」、勝部邦夫「米単作地帯における産業組合の成立—斐川村久木地区について—」、深田喜美恵「能義地方における土地改良の展開」、有元正雄「山陰における地主制の構造」、森安章「鳥根県の農民運

動―出雲地方を中心として―」、池橋達雄「明治前期における鳥根県の道路改修」となっている。

- 18 地方史研究協議会編『山陰―地域の歴史的な性格―』（雄山閣出版、1979年）。近代の論考は、池橋達雄「近代出雲と地主制―鳥根県簸川郡斐川町に事例をとって―」が収録されている。
- 19 内藤正中『鳥根県の百年』（山川出版社、1982年）。
- 20 内藤正中編『図説 鳥根県の歴史』（河出書房新社、1997年）。
- 21 山陰中央新報社百年史編さん委員会編『新聞に見る山陰の世相百年』（山陰中央新報社、1983年）。
- 22 道重哲男・相良英輔編『街道の日本史38 出雲と石見銀山街道』（吉川弘文館、2005年）。
- 23 松尾寿・田中義昭・渡辺貞幸・大日方克己・井上寛司・竹永三男編『鳥根県の歴史』（山川出版社、2005年）。
- 24 中国電力株式会社エネルギー総合研究所編『鳥根県を中心とした産業発展の歴史』（中国地方総合研究センター、2013年）。
- 25 鳥根県教育庁文化財課編『鳥根県の近代化遺産』（鳥根県教育委員会、2002年）。
- 26 鳥根県教育庁文化財課編『鳥根県の近代和風建築』（鳥根県教育委員会、2018年）。
- 27 渡邊太「『裏日本』の形成と伝統の発明―地域の新しい自己像のために―」（『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』第81号、2020年）も参照されたい。
- 28 安達生恒『安達生恒著作集』全5巻（日本経済評論社、1980-1981年）。
- 29 古厩忠夫『裏日本―近代日本を問いなおす―』（岩波新書、1997年）。
- 30 阿部恒久『『裏日本』はいかにつくられたか』（日本経済評論社、1997年）。
- 31 内藤正中編『鳥根県の環日本海交流―地域からの国際化―』（今井書店、1993年）。
- 32 芳井研一『環日本海地域社会の変容―「満蒙」・「間島」と「裏日本」―』（青木書店、2000年）。
- 33 『岩波講座 日本歴史』第21巻、（岩波書店、2015年）。
- 34 小林准士「過疎化が進む地域と資料のゆくえ―山陰地域における資料保存の課題―」（奥村弘編『歴史文化を大災害から守る―地域歴史資料学の構築―』東京大学出版会、2014年 所収）。
- 35 渡辺浩一「『地方消滅』論と民間アーカイブズ」（国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ―地域の持続へ向けて―』勉誠出版、2017年）。本書に対する筆者の書評（『アーカイブズ研究』第27号、2017年）も参照されたい。
- 36 概念図の初出は、作野広和「中山間地域における地域問題と集落の対応」（『経済地理学年報』第52号、2006年）であるが、その後、作野は概念図を発展させている。本稿では、同「集落の無居住化と『むらおさめ』―どうしても守れない集落をどのように捉えるのか―」（『月刊 ガバナンス』第220号、2019年）掲載の概念図を引用している。
- 37 渡邊悟史「中山間地域における歴史実践とその問題―経済成長と集落の変容の位置づけをめぐって―」（『村落社会研究ジャーナル』第21巻第1号、2014年）。また、芦田裕介「村落研究を問う―村研ジャーナルのこれまでの蓄積から―」（『村落社会研究ジャーナル』第28巻第1号、2021年）も参照されたい。この社会学研究グループは、その具体化を目指して入門書を発刊した（渡邊悟史・芦田裕介・北島義和編著・佐藤真弓・金子祥之著『オルタナティブ地域社会学入門―「不気味なもの」から地域活性化を問いなおす―』ナカニシヤ出版、2023年）。筆者は、この社会学研究グループの課題設定に新たな批判的視座の構築の観点から深く共感するが、具体化はまだ道半ばとの印象を持っている。
- 38 岩本通弥「過去に縛られながら未来に向かう―世相と歴史―」岩本通弥・門田岳久・及川祥平・田村和彦・川松あかり編『民俗学の思考法―いま・ここ―の日常と文化を捉える―』（慶應義塾大学出版会、2021年 所収）23頁-24頁。

- ³⁹ 加藤秀雄『伝承と現代—民俗学の視点と可能性—』（勉誠出版、2023年）、同「伝承への倫理」『現代思想—民俗学の現在—』（青土社、2024年所収）
- ⁴⁰ アルフレッド・シュッツ・トーマス・ルックマン『生活世界の構造』（英語版、1973年）。2015年にちくま学芸文庫にて翻訳出版された。
- ⁴¹ 加藤前掲書（2023年）50-53頁。
- ⁴² 神奈川大学日本常民文化研究所編『生活世界の史料学 歴史と民俗42』（平凡社、2025年）。筆者もこの企画に関わった。拙稿「和牛の歴史研究と生活世界」を参照されたい。
- ⁴³ 大川啓「『生活世界の史料学』の現在—日本近現代史研究を中心に—」（前掲神奈川大学日本常民文化研究所編、2025年 所収）。
- ⁴⁴ 安丸良夫『現代日本思想論—歴史意識とイデオロギー—』（岩波書店、2004）212頁、228-229頁。初出は、同「20世紀—日本の経験—」加藤哲郎ほか編『20世紀の夢と現実—戦争・文明・福祉—』（溪流社、2002年 所収）。
- ⁴⁵ 木村哲也「世間師の発見—安丸良夫と民衆思想史—」『宮本常一—民俗学を超えて—』（岩波新書、2016年）第2章。
- ⁴⁶ 本総論では、近年の歴史学界で盛んに議論されている「パブリック・ヒストリー」には言及できなかった。後日を期したい。
- ⁴⁷ 創立100周年記念誌編集委員会編『社会医療法人同愛会 博愛病院 創立100周年記念誌』（社会医療法人同愛会、2022年）では、提供した矢田貝家文書が採録されている。
- ⁴⁸ 中村隆英編『家計簿からみた近代日本生活史』（東京大学出版会、1993年）。
- ⁴⁹ 中西聡・二谷智子『近代日本の消費と生活世界』（吉川弘文館、2018年）。
- ⁵⁰ 中西聡「趣旨説明 2018年度政治経済学・経済史学会秋季学術大会共通論題 消費生活研究の展開と経済史学—近現代日本の経験—」（『歴史と経済』第61巻3号、2019年）。
- ⁵¹ 永原慶二『20世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、2003年）。特に第9章「戦争と超国家主義歴史観」を参照した。
- ⁵² 遅塚忠躬『史学概論』（東京大学出版会、2010年）93-94頁。
- ⁵³ 中村政則「講座派理論と我々の時代」（『歴史評論』397号、1983年）。同『日本近代と民衆—個別史と全体史—』（校倉書房、1984年 所収）。
- ⁵⁴ 高岡裕之「日本近現代史研究の現在—「社会」史の次元から考える—」（『歴史評論』693号、2008年）。歴史資料保存に関して、三村昌司「地域に残された歴史資料はなぜ大切か」（佐藤孝之・三村昌司編『近世・近現代 文書の保存・管理の歴史』勉誠出版、2019年 所収）では、戦後歴史学における地域資料の問題を整理している。参照されたい。
- ⁵⁵ 溝上泰子『日本の底辺—山陰農村婦人の生活—』（未来社、1958年）、同『生活者の思想—続日本の底辺—』（未来社、1961年）。
- ⁵⁶ 荻谷剛彦『追いついた近代 消えた近代—戦後日本の自己像と教育—』（岩波書店、2019年）は、欧米からの輸入理論を演繹的に近現代日本に当て嵌めてきた研究系譜を批判的に整理し、日本の後発近代の経験を帰納的思考通じて理解し直す溝上泰子の実践を高く評価している。この他、天野正子『「生活者」とはだれか—自立的市民像の系譜—』（中公新書、1996年）、鬼嶋淳「溝上泰子論—『国家的母性の構造』から『日本の底辺』へ—」（『戦後知識人と民衆観』影書房、2014年 所収）、上森さくら「溝上泰子による生活論の展開—社会と個人の捉え方に着目して—」（『島根大学教育臨床総合研究』第15号、2016年）にて言及されている。

- ⁵⁷ 中村政則「グローバリゼーションと歴史学―21世紀歴史学の行方―」（『神奈川大学評論』第56号、2007年）
- ⁵⁸ 中村政則前掲論文（2007年）168頁。
- ⁵⁹ 渡部晴基『山陰過疎地域の発展と地域経営』（渡部晴基先生退官記念事業会、2001年）16頁。
- ⁶⁰ 高岡裕之前掲論文（2008年）71頁。
- ⁶¹ 鷺田清一「『右肩下がり時代』をどう生きるか?」『パラレルな知性』（晶文社、2013年 所収）。
- ⁶² 筆者に生まれたこのような発想は、各地での調査経験とともに、小野将「『新自由主義時代』の近世史研究」（『歴史科学』第200号、2010年）から触発された。小野は、近年の地域史研究がたんなる地域主義に陥ってしまうことがないよう警鐘を鳴らしている。つまり、たんに地域特性、地域差にもとづく個性を言いつのるだけでは、教育・医療・福祉など、実質として全国一律の行政水準を担保することこそが社会政策の実現に大きく寄与する局面を見落とししかねず、個性ある地域という名のもとに、新自由主義的な政策・競争に適合・同調した方向性に絡め取られてしまうというのである。批判対象ともなっている吉田伸之は、これまでの地域史研究の歩みをまとめた『地域史の方法と実践』（校倉書房、2015年、86-87頁）のなかで小野論文に触れ、多くの人々にとって必読の貴重な文献であると述べる。地域史研究における新たなオルタナティブの構築が、喫緊の課題となっているといえよう。

謝辞

矢田貝家調査プロジェクトの遂行にあたっては、数えきれないほど多くの方々からのご支援があった。とりわけ伯耆町教育委員会の担当者としてご尽力いただいた長田康平氏、その後任の角田寛幸氏には深甚の謝意を表したい。すべての方のお名前を記せないことを、どうかお許しいただきたい。